

地域公共交通計画(令和9年4月1日改正案) 骨子

【これまでの経緯】

平成29年度に再編した運行ダイヤは、市民の様々な要望に応えるために、高齢者支援に加えて、通勤・通学を支援する通学便や市内観光を支援する幹線を導入し、17路線82便(うち通学便は17便)で運行してきた。結果として、すべての要望に対応しようとしたために、非常に複雑かつわかりにくいダイヤ編成となり、コロナ禍も相まって年間利用者数は著しく減少した。

(平成28年：約18万3千人⇒平成29年度：約13万7千人⇒令和3年度：約10万6千人)

【現状】

令和4年度の第2次鯖江市公共交通計画に基づくダイヤ改正では、利用者が少なかった通勤・通学支援や観光支援を整理し、市民生活に根差したシンプルかつわかりやすい運行ダイヤ、特に高齢者の足の確保に重点を置き、バス8台で9路線74便の運行ダイヤに再編し、利便性の向上を図った。その結果、利用者は毎年増加し、計画期間最終年度である令和8年度には目標数値である年間利用者17万人を達成できる見込みである。

(令和4年度：11万4千人⇒令和5年度：13万6千人⇒令和6年度15万3千人⇒令和7年度：16万1千人)

【令和4年4月の主な改正点】

- 1 循環線の2起点(鯖江駅・神明駅)における定時刻初の運行ダイヤ
→運行時間は8時～19時(土日は9時～17時30分)
*特に鯖江駅は右回りも左回りも00分発
- 2 幹線の廃止→キロ当たり乗車人数が極端に低く非効率的だったため

【モビリティマネジメントの視点の導入】

・モビリティマネジメントは、人の移動手段そのものを賢く変えることにより、渋滞緩和・事故リスク低減・高齢者や交通弱者の移動手段の確保、CO₂削減、健康増進など、社会課題や交通問題の解決に役立つ概念として位置づけられている。

・次期計画では、従来までのバスや電車などの移動手段そのものだけでなく、それを支えるサービスや環境までを含めてマネジメントする「モビリティマネジメント」の視点を取り込むことで、持続可能な交通体系を目指す。

⇒現行の「鯖江市地域公共交通計画」の名称を「(仮)さばえモビリティプラン」に改称する。

【運賃について】

・循環線を中心に運行本数の充実や利便性向上策を展開し、利用者数と満足度の向上を図ることにより、現行の運賃水準を維持しつつ、「将来にわたって持続可能なつつじバス」を実現

【路線等の見直しについて】

・現路線維持を基本とするものの、速達性の向上を図る観点から、利用が少ない区間や時間帯は、便の見直し・廃止、ルートカットを行い、運転士の負担等の軽減を図る。

・バス利用者を増やし、将来にわたってつつじバスを安定運行するために、循環線を中心に利便性の向上を図る。

・循環線の増便

⇒現行の1時間本(右回り左回り・1本ずつ)⇒30分に1本(右回り左回り・1本ずつ)

【今後5年間の目標】

- ・高齢者など今後の交通弱者増を念頭におきながら、「乗って残そう公共交通」を合言葉に、令和13年度（計画最終年度）の、年間利用者数20万人の実現を目指す。

【バスの購入・入替えについて】

- ・バス車両については、これまで導入後13年を目安に更新を行ってきたが、現在の低床バスは構造上、一般的なバスと比較して消耗が早く、また、車体価格の高騰、発注から納品の期間の長期化などを踏まえると、今後の更新計画の見直しが必要な状況となっている。
- ・このため、現時点で予定している令和13年度の車両更新（2台）は見送り、令和13年度以降を計画期間とする次期計画の策定までに、今後の車両更新の在り方について検討する。
- ・循環線の増便により、バス車両を3台程度増やす必要があるが、現時点では購入せず、バス会社からのリースで対応する。